

顔の個人差が表情印象に及ぼす影響

The effect of facial individuality on facial impression

上田彩子¹⁾、須賀哲夫²⁾

Sayako UEDA¹⁾, Tetsuo SUGA²⁾

E-mail: sueda@st.jwu.ac.jp

和文要旨

従来の表情認知研究領域では、その多くが、人間が一般的に表出する表情の、普遍的な運動変化に焦点を当てている。しかし、顔は構造的に普遍性を持つ一方、その内部の個人差が顕著な組織である。この個人差は、表情印象決定に際し、少なからぬ影響を与えていると考えられる。この問題を基に、本研究では、他者が特定人物の表情印象を決定する上で、その人物の持つ、中立表情時における顔の個人差がどのように影響を及ぼすのか、実験的に検討した。実験刺激は、男女が中立・微笑み表情を表出した顔写真である。研究参加者は、これに対し、快-不快次元に基づく評価尺度による、刺激人物から受ける表情印象の判断を行った。その結果、顔の個々の違いは中立表情時の印象に影響することが示された。さらに、中立表情時の印象は、微笑み表出後の違いにも一貫した影響を与えることが示された。以上より、顔は、positiveな印象傾向を示しやすいタイプ (positive 顔) と、negativeな印象傾向を示しやすいタイプ (negative 顔) があることが示唆された。

キーワード： 顔写真、個人差、表情印象

Keywords : Facial images, Facial individuality, Facial impression

1. 緒言

顔は社会的コミュニケーション場面において重要な情報源である [1]。特に、顔が何かしらの運動変化を表出した場合、我々はそれを表情として認知する [2]。

表情認知については、この20年来多くの先行研究がある。近年の研究動向を例にとれば、人間が有限個の基本情動カテゴリ (喜び、悲しみ、怒りといった感情) を有することを主張する立場があり、この立場では情動カテゴリと一対一の関係で対応する、同数個の表情 (喜びには喜びの表情、怒りには怒りの表情など) を設定している。そのため、ある特定表情を見た場合、すぐさまパタンマッチングが生じて、それと対応した情動カテゴリを知覚するとしている (表情認知のカテゴリ論) [3]-[7]。

一方、カテゴリといった感情間を区分する境界線を設定しない立場も存在する。この立場で

は、代わりに快-不快、覚醒度といった、いくつかの次元から構成される心的空間を仮定している。そのため、ある特定表情を見た場合、その表情は心的空間のいずれかの位置にマッピングされる。喜びといった感情のカテゴリラベルは、マッピングされた位置から結果的に付与される (表情認知の次元論) [8]-[11]。

上記の説は、いずれも人間が一般的に表出する表情の、普遍的な運動変化 (例えば、喜び表情の口角上昇という運動変化) に焦点を当てたものだと考えられる。すなわち、表情という概念をマクロな視点から捉えたものだといえる。しかしながら、顔は構造的に普遍性を持つ (2つの眼、1つの鼻・口の存在、位置関係) 一方、その内部の個人差 (眼・鼻・口の形、大きさなど) が顕著な組織である。我々はこの個々の顔が有する差異に注目し、他者の特定を行っている [1]。日常のコミュニケーション場面で、実

¹⁾ 日本女子大学大学院人間社会研究科、The Graduate School of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University

²⁾ 日本女子大学人間社会学部、The Faculty of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University